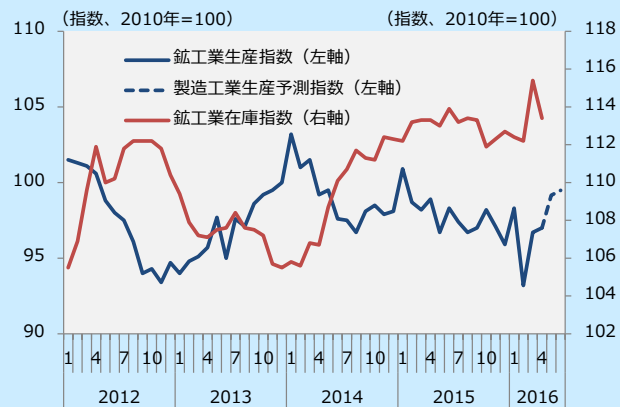


日本：鉱工業生産指数（2016年4月）

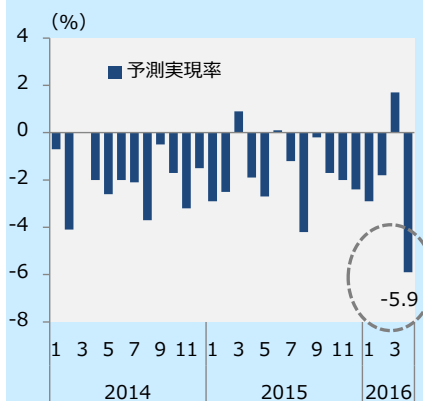
—熊本地震等による生産下振れも前期比プラスを確保

MRI Daily Economic Points
May 31, 2016

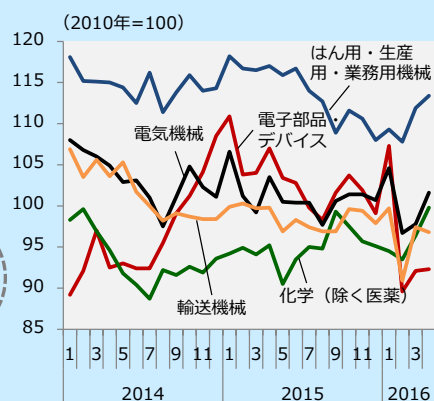
図表 鉱工業生産／在庫指数



図表 予測実現率



図表 業種別の生産指数



評価ポイント

2016年4月の結果

- 2016年4月の鉱工業生産指数（速報）は、季調済前月比+0.3%と2ヵ月連続の増加となった。熊本地震による生産停止から、生産下振れが懸念されが、他地域での代替生産などもあり小幅ながらも前期比プラスを確保。
- ただし、上記の生産下振れ要因がなければ、より高い伸びを達成していた可能性が高い。製造工業生産予測調査によると、4月の予測実現率は▲5.9%と東日本大震災時（▲18.9%）以来の下振れとなった。2月の愛知製鋼の爆発事故からの挽回生産の過程にあった輸送用機械が▲12.6%と大幅に予測を下回った影響が大きい。
- その他の業種では、パソコンなどの販売不振から情報通信機械工業が2ヶ月連続の低下となったほか、金属製品工業は前月の反動もあり低下。一方、化学工業は、インバウンド需要などによる化粧品の需要増を背景に2ヶ月連続の上昇となったほか、夏向けのエアコンの増産などから電気機械工業も上昇。はん用・生産用・業務用機械も、アジア向け輸出の不振による低迷から持ち直しの動きがみられる。
- 在庫指数は、輸送機械の挽回生産で在庫が急増した3月の反動もあり、前月比▲1.7%と2ヶ月振りに低下した。もともと、在庫水準は依然高い。
- 製造工業生産予測調査によると、5月（前月比+2.2%）、6月（同+0.3%）と上昇を予測。

基調判断と今後の流れ

- 生産は、内外需の弱さを映じて低下傾向にあるが、一部に持ち直しの動きもみられる。5月の連休明け頃には、熊本地震からのサプライチェーンの復旧も本格化した。
- 生産の先行きは、当面は、在庫調整に時間を要する中、自動車の燃費不正問題が生産下振れ要因となろう。年央以降は、①欧米向け輸出の緩やかな回復、②雇用・所得環境の改善による消費の緩やかな回復を背景に、徐々に持ち直しに向かうだろう。リスク要因としては、新興国経済の低迷や英国のEU離脱による国際金融市場の不安定化が挙げられる。